

園の取り組み事例②

藤島幼稚園（福井県・私営）

組織マネジメントを見直して 子どもや保育者をつなぎ、 保育者の「やってみよう」を促す

取り組みの ポイント

- 子どもの遊びや保育者の思いを把握して発信する「わくわくコーディネーター」を配置。
- 子どもの遊びやつぶやきをつないで広げる実践と、保育者同士をつなぐ実践で、保育や子どもについて語りやすい雰囲気をつくり、保育者の主体性を高める。

組織マネジメントにより、子どもや保育者の間につながりを育む

園全体で話し合う場が少なく 保育者間につながりが希薄に

福井県にある藤島幼稚園は、240人の園児を抱える園です。同園では以前から、担任に比較的若手の保育者を据え、中堅以上の保育者が担任をもたないフリーの立場で支えるという形で、年齢ごとにチームで協働する体制を構築してきました。

2018年度、幼保連携型認定こども園に移行後は保育時間の長い子どもが増えたこともあって職員数が増加。課題の共有や話し合い時間の確保、全員参加の研修の実施などが難しくなっていました。園長の杉山^{さと}聡理先生は次のように話します。

「担任、フリー、短時間勤務などさまざまな立場の保育者がいる中で、保育観や子どもの見方、経験、スキルなどの差にとらわれてしまうことが、以前からの課題でした。園の形態が変わるとさらに忙しさが増して、保育を振り返る時間や保育者同士で話をする時間が減り、めざす保育の共有といった核となる部分での連携が不足してしまいました」

お話ししてくださった先生方



藤島幼稚園
園長
杉山^{さと}聡理先生

わくわくコーディネーター
佐々木^{てらえ}光江先生



保育者の意識のばらつきは、働きづらさにつながっていた一面もありました。考えや思いを伝え、認め合う機会が少ないため、保育者が悩みを抱え込みがちになり、日々子どもと真剣に向き合い、保育者として成長しているのに、本人がその実感を得られずに自信を失ってしまう姿もありました。加えて担任とフリーの保育者との関係も、あまりうまくいっていないケースがあったといいます。

「長年幼稚園として運営してきたこともあり、『担任が責任をもってクラスの子どものを見る』という意識が比較的強い中で、フリーの保育者の立ち位置が『担任をサポートする』というあいまいなも

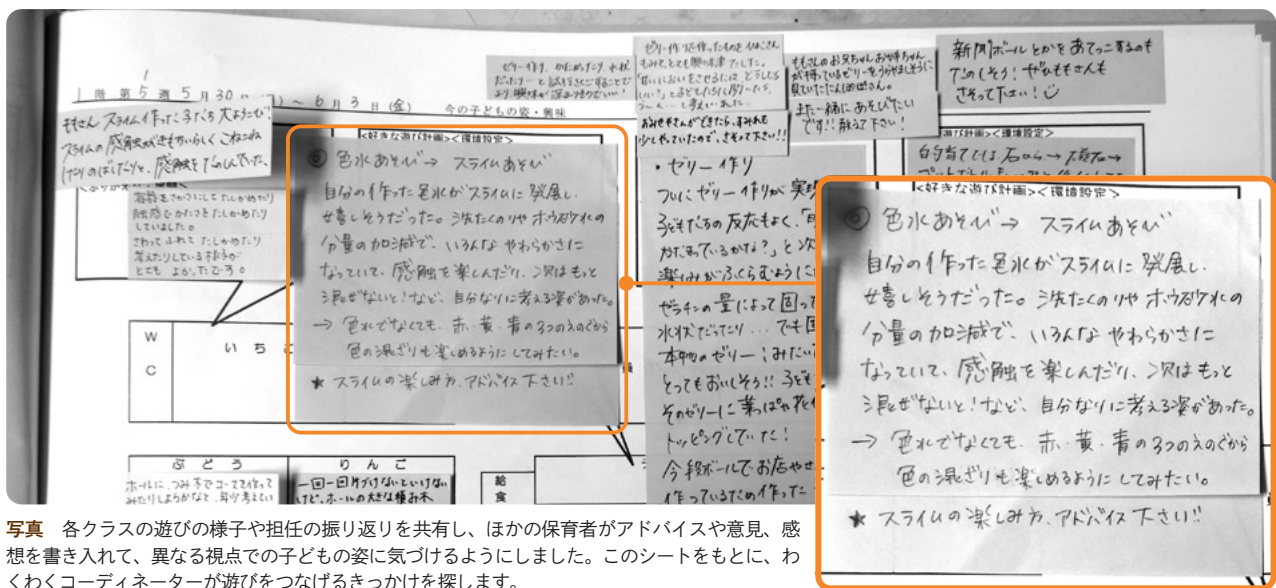


写真 各クラスの遊びの様子や担任の振り返りを共有し、ほかの保育者がアドバイスや意見、感想を書き入れて、異なる視点での子どもの姿に気づけるようになりました。このシートをもとに、わくわくコーディネーターが遊びをつなげるきっかけを探します。

のであったことも関係していたと思います。みんなまじめであるが故に遠慮がちで、自分が頑張らなくてはいけないとの思いからフリーの保育者に相談してよいかを悩む担任と、手助けしたいけれど担任の邪魔になるのではないかを悩むフリーの保育者、という構図がありました。どちらも互いを尊重しすぎて、どうするのがよいかわからない状態でした」(杉山園長)

わくわくコーディネーターの実践① 「遊びをつなぐ・広げる」

そうした状況の改善に向けて、同園では2022年度に組織マネジメントの見直しにより、保育者間の連携を円滑にして、保育者の働きやすさを向上させる試みを開始。杉山園長の発案で「わくわくコーディネーター」を配置することにしました。

「本園がめざす子ども主体の保育を実現するためには、保育者も主体的になることが必要だと感じていました。『やってもいいのかな』と迷う気持ちから脱し、わくわくした気持ちをもちながら『やってみよう』を探せるよう『わくわくコーディネーター』という名前の役割を設けました」(杉山園長)

多様な視点からアイデアが出るように、わくわくコーディネーターには経験豊かな保育者のほか、1年めの若手保育者も加えた5人を配置しました*1。

こうして、わくわくコーディネーターチームはフリーの保育者の立場で保育に自由に参加し、子どもの遊びの様子や担任の思いを総合的に把握。週1回の頻度で情報を持ち寄って話し合うことで、園内にさまざまなつながりを生み出すことをめざしました。最初に試みたのは、「遊びをつなぐ・広げる」実践です。わくわくコーディネーターを務める佐々木光江先生は、次のように振り返ります。

「クラスごとに進行している遊びを園内で共有してうまくつなげられたら、もっと遊びが広がりそうだと考えました。そこで、毎週末、各クラスで盛り上がっている遊びを、担任の振り返りや悩みとともに付せん紙に書いてもらうことにしました」

わくわくコーディネーターは、各クラスの付せん紙をもとに「あそびの共有シート」(写真)を作り、子ども同士の遊びがつながるきっかけを探して働きかけを始めました。

例えば、3歳児がハサミに興味をもち、画用紙や毛糸を切ることを楽しんでいた時期がありました。担任はお店屋さんごっこに発展させて友だちと遊ぶ楽しさを知ってほしいと考え、お店を作りましたが、一部の子どもにしか広がらず、「子どもの『やりたい』と、保育者の『やってみよう』がずれていた」と悩んでいました。同時期に4歳児ではおままごとが盛り上がっていました。わくわくコーディネーターは、3歳児のお店屋さんごっこと4歳児のお

*1 わくわくコーディネーターは、園内の保育者から配置。2023年度は6人が担っている。

ままごとが結びつくかもしれないと、それぞれの担任に提案したところ、異年齢の子どもたちがさまざまなお店を作って買いものを楽しむ、本格的なお店屋さんごっこに発展しました。

わくわくコーディネーターの実践②

「こどものつぶやきをつなぐ」

子ども主体の保育の実現に向け、「こどものつぶやきをつなぐ」実践にも取り組みました。保育者が拾った子どものつぶやきをそのまま付せん紙に記録する「こどものつぶやきシート」を作成し、それをもとに遊びや環境構成を考える試みです。

「子どもの素直な気持ちが表出されたさまざまな

つぶやきから、子どもの思いを知ったり、自分が聞き逃していたつぶやきから、『そこに着目するのか』と子どもを見る視点が広がったりして、意見交換も活性化していきました」（佐々木先生）

つぶやきを出発点として構成した遊びでは、子どもたちが「自分の見つけ出した遊び」という思いで熱心に取り組む様子を実感できたといいます。例えば、「かぜ、きもちいい」「やさしいかぜがふいてきた」と、複数の子どもから風への興味が感じられるつぶやきが聞かれた際、園庭に風で揺れるように平テープをつるすなど、風を体感できる環境を用意すると、「かぜのカーテンをつくろう」「かぜとたたかいごっこをしたい」など、子どもの興味がどんどん広がりました。

🌸 保育者同士が支え合う関係性が、「やってみよう」につながる 🌸

わくわくコーディネーターの実践③

「保育者をつなぐ」

わくわくコーディネーターと年齢ごとの学年主任、現場に近い園内リーダー*2が協働して、「保育者をつなぐ」ための研修の改善も進めました。2022年度は園内リーダーの意見を聞いて、より必要感のある研修をするとともに、研修内容を園内で共有する「園内研修シート」を作成。研修で話し合った内容を書き込み、事後に職員室に掲示することで、担当以外の年齢の研修を共有して、コメントを伝え合う試みを行いました（**図1**）。

「全員集まるのが難しい状況でも、シートを活用して話し合いの内容を共有することで、認め合いが増え、園内に一体感が生まれました。自分の発言や実践に対してコメントをもらえることが、保育者の自信にもつながっています。ただ、シートを書くのは大変さも伴うため、毎回行うのは難しいとも感じました」（杉山園長）

園内研修は担当年齢ごとに月1回実施しています。2023年度はシートを使った研修はしていませんが、以前は平日に約1時間だった研修を、「子ど

図1 園内研修シート

他年齢の研修に対してコメントを書き込み、それを共有することで、日々の保育に生かすことを主眼に置きました。

もについて、じっくりと話したい」という声を受けて、土曜日に2時間半ほどかけて行う形にしています。

「研修方法は変わりましたが、おやつを用意して、ざっくばらんな雰囲気の中で互いの考えを伝え合っています。昨年度の実践で園内につながりが生まれたことで、自分の考えを話したいという気持ちが生じているのだと思います。今後も先生方の状況に応じて、よりよい研修の方法を模索していければと考えています」（佐々木先生）

園内研修（園内）シート	異学年からの視点
① 思ったよりいいなと思ったところ	
② 子どもから聞かされた学びがあるのでは？	
③ 私ならこうしてみたい（やってみよう）	
④ 学年を越えての気づき	

保育を共有し、つながりを生むことが保育者の主体性を高める

わくわくコーディネーターが起点となって子ど

*2 同園の園内リーダーはミドルリーダーが担い、園内研修を計画するなどの役割をもつ。

もの遊びやつぶやき、保育者同士をつなぐ中で、遊びを捉える視点が深まりました。さらに保育者が連携する機会が増え、日常的に子どもの姿や保育の様子を伝え合う風土が生まれました。

「みんなで保育を共有できる喜びを感じられるようになったと思います。ほかの保育者がチャレンジする姿を見ることで『やってもいいのかな』が『やってみよう』になり、保育を楽しむ姿が見られます」(杉山園長)

そうした関係性は、保育者の主体性の向上にもつながっています。クラスや年齢を超えて子どもの遊びをつなぐよさを実感できたことで、わくわくコーディネーターを介さなくても、担任同士が自然と連携するようになりました。例えば、5歳児が楽しんでいた楽器作りと、3歳児が楽しんでいた歌を担当同士がつなぎ、手作りのステージでの合同発表会に発展していくこともありました。

「実践を共有したことで話しやすくなり、『こんな遊びがあるんだね』『もっとこういうことをやってみよう』など、先生方が自分の考えを素直に言葉にできるようになりました。こうした横のつながりから安心感や自信が生まれ、先生方の意欲も高まっているようです」(佐々木先生)

子どもたちが遊びに向かう姿も大きく変化しています。遊びの内容や場所などの選択肢が増え、

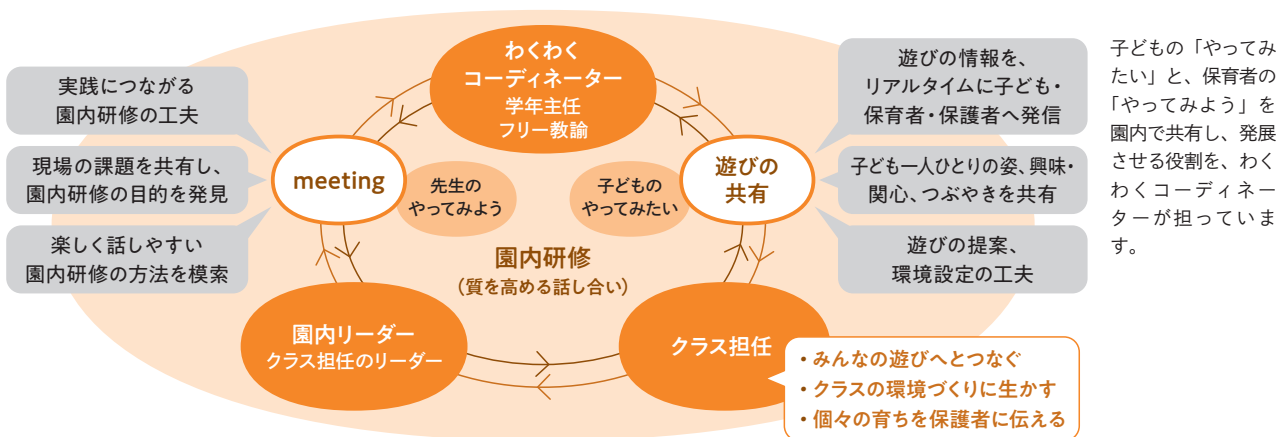
好きなことを好きな場所で思いきり楽しむ姿が、園内のあちこちで見られるようになりました。年上の子どもの遊びをモデルとして「自分もやってみよう」と、自分から遊びをつくり出す気持ちも強くなったといいます。

わくわくコーディネーターの実践による園内の変化を踏まえ、杉山園長は今後について次のように語ります。

「2022年度の実践で園内につながるの土台ができました。そうした変化に応じて私たちの課題も変わっていくため、わくわくコーディネーターの役割も今後は変わっていくでしょう。保育者にとって保育は仕事ですから、しんどさや悩みをゼロにはできません。それでも、仲間とつながって支え合いながら、それぞれの強みを生かして『やってみよう』面白さを感じられるようにすることが、この仕事を続けていく原動力になります。そこをわくわくコーディネーターが支え、経験年数や立場にかかわらず、すべての保育者がわくわく感をもって『やってみよう』と思える環境を整える。そうして、みんなで前に進んでいければと思います」

クラス担任とは異なる視点を持ち、園内の課題解決に向けて主体的に動くわくわくコーディネーターという役割を、すべての保育者に経験してもらいたいと、今、杉山園長は考えています(図2)。

図2 日々の実践をつなぐわくわくコーディネーター



学校法人藤島学園
藤島幼稚園

福井市北部の文教地区に位置する。1969(昭和44)年の設立以来、「うつくしい心」の育成を教育理念に掲げ、生きる力の土台となる心の教育を大切にしている。

- ◎ 園長：杉山聡理先生
- ◎ 所在地：福井県福井市経田 2-512
- ◎ 園児数：240人(2023年10月現在)